

21世紀COEプログラム 平成15年度採択拠点事業結果報告書

1. 機関の 代表者 (学長)	(大学名) 同志社大学	機関番号	34310
	(ふりがな<ローマ字>) (氏名) HATTA EIJJI 八田 英二		

大学の将来構想

(1) 拠点形成の将来構想

同志社大学は、創立(1875年)以来、キリスト教主義、自由主義、国際主義を教育の理念として、多くの「良心を手腕に運用する人物」を輩出してきた。

平成15年度(申請時)から、研究教育の高度化をはかり、世界的な研究教育拠点を形成するため、研究センター方式による新たな研究領域の開発と研究体制の改革を進める「研究開発5ヵ年計画」をたてた。

建学の精神に基づき、グローバルな現代の諸課題に取り組む「研究センター」を立ち上げ、「同志社だからできる」かつ「同志社しかできない」研究拠点形成を目指した。21世紀に向う「共生への志」(同志社創立125周年記念シンポジウムテーマ:2000年11月)の実質化を理念として、次の基本コンセプトを掲げた。

- ①人々の安心・安全・幸福の追求 (Security)
- ②人道・人権、社会正義の実質化と保障 (Humanity)
- ③豊かな社会を実現するシステムの構築 (Quality)

このような理念のもと、2003年2月に8つの研究センターを立ち上げ、これらの研究センターと大学院研究科との連携による研究教育拠点形成を進めるものであった。具体的には、6つの「21世紀COEプログラム」を推進し、新たな研究科専攻の設置、研究科横断的インスティテュートなどの創設を目指した。

結果として平成15年度21世紀COE採択は、「一神教の学際的研究」と「技術・企業・国際競争力の総合研究」の2つのプログラムであった。なお、不採択となった拠点についても、事業規模を縮小せざるを得ないものの、次に述べる大学としての「支援策」は5年間継続して行うものとした。

21世紀COEプログラム終了後の大学の対応については、同志社大学の特色ある拠点形成を継続して発展させるため、「高等研究教育機構(仮称)」を設置して、若手研究者育成を強化する基本方針を明確にした(平成17年「中間評価進捗状況報告時」)。

(2) 大学の支援策及びマネジメント体制

拠点形成推進のための体制として、研究センター(群)と、既存のリエゾンオフィス、知的財産センター、寄付教育研究プロジェクト(群)をあわせ、新たに研究開発推進機構を設置し、研究推進・支援を統合

的に行う体制整備を図るものとした。支援の事務組織として、事務組織の改組を行い、研究開発推進室(研究開発推進課、研究支援課の2課体制)を同機構のもとに置いた。COEプログラムの事務所管課を研究支援課とし、申請時は室長1名のほか、課長1名、課員2名で発足した。

拠点形成のための大学の支援策としては、①多彩な研究人材を集めるため、専任フェロー、客員フェロー等研究員制度を整備すること。②国際的な人材育成の拠点整備のため、海外の学術研究機関との交流を一層促進すること。③拠点形成の「研究センター」に対する予算措置、スペースを確保することを柱とした。

研究人材の確保については、申請時、専任フェロー3名、客員フェロー21名(いずれも6つのCOEプログラムの計)であったが、本拠点形成計画のみならず、大学全体の研究人材の充実をはかるため、任期付教員制度、客員教員制度等を整備するとともに、あわせて「教員増員計画」を打ち立てた。2003年度本学教員数は488名(助手を含む)であった。

学長を中心としたマネジメント体制については、大学の支援の具体策を迅速に決定し、実施するために学長を本部長とする「COE推進本部会議」を設置した。

「COE推進本部会議」は、各拠点リーダーと密接な連携を図り、検討・実施すべき事項として次の7項目を定めた。①拠点形成に係る施設・設備の整備、②拠点形成計画に係る大学院整備計画の策定、③事業推進担当者以外の研究員、研究支援者などの受入れ体制の整備、④若手研究者育成のための必要な制度等の整備、⑤国際的な連携プログラムを実施するために必要な情報環境の整備、⑥研究成果の公表、発信に関する支援措置、⑦事業推進担当者が事業実施に必要な時間を確保するための負担軽減措置である。

また、21世紀COEプログラムの遂行にあたり、全体的な視点から、学長が適切な助言を求めることのできる「COE学長特別補佐」を置くこととし、COEプログラムの拠点リーダーあるいは専任フェローから3名を委嘱することとした。

先述したように、COE採択拠点は2つにとどまったことにより、大学として、この21世紀COEプログラムの実施のため、全学を挙げて取り組むこととした。

### 3. 達成状況及び今後の展望

#### (1) 達成状況

##### ① 拠点形成の将来構想

採択時の大学将来構想は、一言でいえば、新たな研究領域を切り開き、建学の精神に根ざした特色ある研究教育拠点を形成し、国際的な若手研究者を育成することであった。採択時は8つの研究センターであったが、「一神教学際研究センター」（以下「C I S M O R」という）、「技術・企業・国際競争力研究センター」（以下「I T E C」という）を中核とした21世紀COEプログラムの採択により、学内におけるプロジェクト研究、競争的資金への応募の意欲が高まり、平成20年3月現在で24の研究センターが設置されている。これらの研究センターは、COEプログラムのほか私立大学学術研究高度化推進事業、大学院教育改革支援プログラムなどの推進役を果たしている。2つのCOEはもとより、多くの研究センターの活発な研究活動により、本学の研究水準は確実に向上してきている。

大学院教育体制の整備については、「一神教の学際的研究」プログラムでは当初の計画どおり、平成17年度、神学研究科に「一神教学際研究コース」を開設した。「技術・企業・国際競争力の総合研究」プログラムでは独立研究科の開設を目指したが、そこまでは至らず、平成17年度から総合政策科学研究科（博士後期課程）の「技術・革新的経営研究（T I M）コース」として出発した。T I Mコースは、平成21年度から、T I M専攻（博士5年一貫制）として充実する。さらに、COEの拠点ではないが「ヒューマンセキュリティ研究センター」の研究実績をもとに、総合政策科学研究科に「ヒューマンセキュリティ研究コース」を開設している。これらのコースは「研究科横断的インステテュート」としての貴重な試みとして、今後の大学院改革に繋がるものと考えられる。

平成19年度には、高等研究教育機構（学長が機構長）を設置し、C I S M O RとI T E Cを同機構の「先端的教育研究拠点」に指定し、21世紀COEプログラム「後」も継承発展させる体制の整備を行った。

##### ② 大学の支援策及びマネジメント体制

国際的な若手研究人材育成のためには、海外の研究拠点との連携・交流が必要であり、本学は、平成17年に国際連携推進機構を設置し、研究者、学生の国際連携・交流を積極的に推進・支援してきた。特に本COEの研究科間、研究センター間の連携・交流を支援し、申請時2か国3大学・機関であった海外の連携機関は、

平成20年3月現在15か国19機関となっている。

研究者の充実については、客員フェローとして内外の著名な研究者の受け入れを強化し、申請時は、C I S M O R4名、I T E C10名であったが、現在、それぞれ14名、11名を受け入れている。また、大学全体の教員充実策をすすめ、現在、専任教員は有期を含み685名である。

支援の事務体制については、研究支援課の人員増（係長1名、課員1名、支援契約職員2名）をはかるとともに、C I S M O R、I T E Cの研究支援者の充実をはかってきた。

COE推進本部会議を中心とした学長のマネジメント体制については、客員フェロー、RA、COE特別研究員等研究者の受け入れやその制度的な整備、スペースの確保及び予算措置、事業推進担当者の負担軽減措置などは、迅速に決定され実施されてきたといえる。また、国際連携の支援については、国際連携推進機構で行うこととなり、本COE推進本部会議で扱うことは少なかった。

COE推進本部会議は、学長を始め大学執行部と拠点リーダー、サブリーダーとの会議体であり、具体的な支援策については拠点側の要望を汲み入れ迅速に決定してきたことは評価できるが、21世紀COE「後」の大学の拠点形成をどのように進めるかについて、早い段階で突っ込んだ議論がなされるべきであった。この点における討議の不足は率直に反省すべきことである。「COE学長特別補佐」についても、3名が属するプログラムが不採択であったという事情もあり、単発的・個人的な助言にとどまり、効果的、組織的な活用には至らなかった。

#### (2) 今後の展望

本COEについては、グローバルCOEへ発展させるべく申請をしたところである。

今後、本学は、①教員の個人研究を基盤としつつ、新たな研究領域の開発、プロジェクト研究を推進するための研究開発推進機構と、②先端的な研究を実施し、大学院における若手研究者育成と連携したプログラムを実施するための高等研究教育機構という2つの仕組みでもって、研究教育の拠点化を推進していく。そのためには、大学院教学体制の改革が必要であり、現在、総合企画会議（学長が議長）で真剣な議論を展開しているところである。また、研究組織の見直し（研究環境構想）も視野に入れて研究水準の向上を図っていく所存である。



## 6. 拠点形成の目的

本拠点は、同志社大学の建学の精神であるキリスト教主義、自由主義、国際主義を21世紀にふさわしい形で深化・展開していくことを目指している。具体的に言えば、教育面に関しては、現代世界の複雑な政治状況や紛争を正しく把握し、問題解決の道筋を示すために、宗教・政治・文化の教養を学際的に身につけた人材を育成することを目的としている。また研究面に関しては、9.11テロ事件以降、西欧とイスラーム世界の文明の衝突状況が顕在化しつつある中で、一神教世界の構造と論理を析出し、対話と共存の道を模索すること、平和形成のための学問的・政策的提言を行うことを目的としている。また、一神教世界の動向を日本社会に正しく伝えることも、重要な目的となる。

日本における一神教受容は歴史が浅く、未だに一神教の理解は十分なものではない。にもかかわらず近年では対象の十分な理解を欠くままに、平和と共存の原理である多神教に基づく日本文明を、独善と争いの元となる一神教文明に対する解決策とみなす安易な議論が罷り通る傾向がある。本研究は、実証的な一神教研究によって、一神教の本質を明らかにすると同時に、その対立概念としての多神教概念への反省も迫り、日本文明の自己理解にも貢献する。

欧米とイスラーム世界の対立抗争の歴史は、両者にユダヤ・キリスト教とイスラームの対立の相を際立たせ、一神教としての統一的把握を妨げさせてきた。その意味において、歴史的しがらみから自由な「外部」に位置し「中立的」「客観的」な研究が可能な日本から、一神教研究を発信する意義はきわめて大きい。特に9.11以降顕在化した「文明の衝突」状況において、日本は国際的にも欧米とイスラーム世界の仲介者の役割を期待されているが、仲介の成功には、まず一神教の正しい理解が必要であるからである。また、英語・アラビア語・日本語による情報発信は国際世界の関心を喚起すると考えられる。

戦後の日本はアメリカをモデルとする国づくりを目指し、アメリカは日本にとって最も重要な同盟国であり、また日本は政治・経済・社会・文化のあらゆる側面において圧倒的な影響を受けてきた。ところが日本のアメリカ理解に

おける盲点が宗教であり、アメリカが世界でも最も宗教的（＝キリスト教的）な国であり、その行動原理が一神教の論理に深く規定されていることは十分に認識されていない。グローバル化の名の下における「アメリカ化」によって9.11以降の世界におけるアメリカの影響力の拡大が加速化されている現在、一神教研究としてのアメリカ研究は日本の進路を定める上でも大きな意義を有する。

以上のような目的を遂行していくために本拠点は、キリスト教神学、イスラーム学、ユダヤ教研究、（比較）宗教学、地域研究、国際政治学、科学史、比較文明論研究、アラビア語・ヘブライ語教育をカバーしている。

一神教研究を内的な課題として扱ってきたのは、ユダヤ教・キリスト教・イスラームそれぞれの神学や法体系であるが、本拠点は、そうした個別の伝統を踏まえながらも、一神教の相互理解を可能とする学問的基盤を形成することを目指している。そのために比較宗教学的な視点は不可欠である。日本の文化に影響を与えている多神教との比較研究なども、そこには含まれる。

一神教を研究対象としなければならない外的な要因も存在する。現代世界における政治状況や紛争を正確に理解し、問題解決を図っていくためには、一神教世界の論理や行動様式を分析する必要がある。その際、支配的なプロパガンダから学問的に適切な距離を置き、宗教の実際を観察していくために、地域研究を欠かすことはできない。本拠点では、アメリカ研究とアラブ世界を中心としたイスラーム地域研究に焦点を当てる。英語だけでなく、アラビア語やヘブライ語の習得が求められることは言うまでもない。

さらに、同時代的な地域研究に加え、一神教の相互に亀裂をもたらしている要因の一つである近代化の問題を文明論的に考察していく。イスラームは近代科学を生み出す母体となっているが、それが開花したのはユダヤ・キリスト教世界であった。こうしたプロセスが現代に及ぼしている影響と、将来のあるべき展開を洞察していくために、一神教世界の全体を射程におさめることのできる科学史研究が必要となる。

## 7. 研究実施計画

### (1) 「一神教学際研究センター」の設立

「一神教学際研究センター」を設立し、ユダヤ教、キリスト教、イスラームに関する内外の神学、宗教学、比較文明学、地域研究、国際関係論などの学問分野において優れた業績をあげてきた研究者を集めて研究会や国際ワークショップを開催し、研究者のネットワークを構築し、最終年には世界の代表的研究者を集めた国際シンポジウムを開き研究成果を総括する。

また同センターを拠点として、「比較一神教学会」を設立し、学会誌『比較一神教研究』（日本語版・英語版・アラビア語版同時発行）を発刊し、世界に向けた研究成果の情報発信を行う。

### (2) 関係諸大学・研究機関との学術交流の推進

ハーバード大学（米）、ジョーンズ・ホプキンス大学（米）、ハートフォード神学大学（米）、GTU（神学大学院連合）（米）、Henry L. Stimson Center（米）、国際イスラーム大学（マレーシア）、国立イスラーム学院（インドネシア）、カイロ・アメリカ大学（エジプト）、イマーム・サーディク大学（イラン）、ヘブライ大学（イスラエル）などユダヤ教、キリスト教、イスラームの世界的レベルの教育研究機関と、教官と学生の両レベルでの学術交流を積極的に展開する。特にマレーシアには「異文化理解・語学研修センター」を設立し、国際イスラーム大学と緊密な連携を取りながら、研究・教育活動を行う。

### (3) 三宗教の聖職者の交流の推進

ラビ（ユダヤ教）、神父・牧師（キリスト教）、イマーム（イスラーム）らに対し、人権、多文化主義、民族、グローバリゼーション、環境問題など、現代世界において三宗教が共通に抱える諸問題について、相互に問題提起しあい、学びあうことの出来る実践的なプログラムを提供する。

### (4) 世界最高水準の学術ウェブサイトの構築

それぞれの宗教についての伝統・教義・歴史・儀礼・トピックスなどを、動画等のリッチ・メディアを活用して、わかりやすく社会に伝達する。また、関連する学術情報をアーカイブし、研究者間の情報ハブとしての役割を果たしていく。コンテンツは、日本語・英語・アラビア語で配信する。

以上の研究計画を遂行していくために、一神教学際研究センターのもとに次のような部門およびリーダーを配置し、また各部門にセクションと担当者を配置する（一部に後述の「教育実施計画」の運用も含む）。

研究部門（リーダー：中田 考）

教育・研修部門（リーダー：小原克博）

国際ネットワーク部門（リーダー：村田晃嗣）

情報発信部門（リーダー：四戸潤弥）

また、上述の研究計画を実施するための年度ごとの計画および主目的に関して、次に略述する。なお、公開講演会は毎年度頻繁に開催されている。また、平成17年度までは二つの部門研究会、「一神教の再考と文明の共存」研究会と「アメリカのグローバル戦略と一神教世界」研究会を定期的に開催し、また、中間評価での助言を受けとめ、平成18年度からは「日本宗教から一神教への提言」研究会を追加している。また、毎年度、研究成果報告書を刊行している。

【平成15年度】主目的：一神教学際研究センターの設立、基盤となる研究・教育プログラムの開始。

中東・アフリカ・東南アジア・アメリカ・ヨーロッパ・日本の研究者と博士課程学生による「国際ワークショップ」の開催。

【平成16年度】主目的：比較一神教学会、異文化理解・語学研修センターの設立・運用。

「比較一神教学会」の設立と学会誌『比較一神教研究』の発行（英語・アラビア語・日本語）。海外研究機関との学術交流協定の締結と交流の実施。三宗教聖職者交流会議の開催。「異文化理解・語学研修センター」（マレーシア）の開設。

【平成17年度】海外との学術交流の積極的展開、若手研究者の活動促進。

三宗教聖職者交流会議の開催。関係大学・研究機関とのワークショップ（マレーシア・国際イスラーム大学）の開催。

【平成18年度】世界に対するアピール、研究・教育成果の国際的舞臺における検証。

国際ワークショップの開催。

【平成19年度】研究・教育成果の総括、世界的研究教育拠点としての最終整備。

5年間の研究成果の総括。

## 8. 教育実施計画

一神教学際研究センターを拠点として、以下のような三つの柱を立てて、大学院教育を本プログラムに組み込む。大学院生は、親密かつインテンシブな教育（下記A）を受けた後、各人の課題に関連する現地に赴き、担当教員の指導のもと、実践的な訓練を受ける（下記B）。そして、文明間対話の担い手として自立していくために、自ら責任を負いながら、大学院生主体の国際プロジェクト、国際ゼミ交流を企画していく（下記C）。そうした経験の中で、問題発見能力・問題解決能力を向上させ、具体的な国際貢献のあり方のモデルを蓄積していく。このような形で訓練を受けた若手研究者たちが、後に続く大学院生たちをチューターとして指導し、教育成果を積極的に継承・循環させていく。

### A. チュートリアル・エデュケーション

#### 【教員との共同研究】

学生各人が設定したテーマを多角的に捉えていくために、少人数の共同研究グループを形成し、それぞれが主体的な課題発見と問題解決をすることができるよう、教員が積極的に参与していく。

【有給の研究員制度、大学院生の研究奨励制度の整備】

有給の研究員制度を整備し、高度な研究能力を有する大学院後期課程学生を「COEリサーチ・アシスタント」として採用し、高いレベルの研究を遂行しうる研究環境と研究費とを制度的に保証し、一神教に関し社会的ニーズの大きい問題の研究を委嘱する。十分な学問的訓練を受け、また教育能力の高い者を公募により「COE研究指導員」として採用し、研究・教育の指導を委嘱する。

【英語・ヘブライ語・アラビア語インテンシブ・コースの設置】

国際語としての英語に加え、一神教世界を理解するためには現代ヘブライ語やアラビア語の高度の運用能力が求められる。そのために、入門から上級に至る、きめの細かい語学プログラムを用意する。

### B. オンサイト・エデュケーション

【「異文化理解・語学研修センター」の開設・

運用】

マレーシアに「異文化理解・語学研修センター」を開設する。そこでは、多民族・多宗教のアジア的共存のあり方の体得を目標として、アラビア語、英語、マレー語のインテンシブ・コース、およびイスラーム、キリスト教、ヒンドゥー教の体験学習プログラムを常備する。この研修センターは一神教学際研究センターの海外拠点としても機能する。

【短期留学、長期留学制度の拡充】

学生のニーズに合わせた多様な留学制度を整え、また積極的に海外留学生を受け入れるための基盤整備を行う。

【短期調査・取材実習】

国内および海外で時事性の高い問題を調査・取材するために、在外公館の利用法、プレス取材許可の取得方法、インフォーマントの選定、ラポールの作り方などを習得する現地実習を行う。

【海外ボランティア支援】

特にイスラーム世界の現実を知るために、国際NGOなどの協力を得ながら、現地の人々が具体的にどのような助けを必要としているのかを見据え、それに見合った支援活動に取り組んでいく。

### C. インディペンデント・エデュケーション

【大学院生主体の国際ワークショップの開催】

中東、東南アジア、アメリカ、ヨーロッパから大学院生を招待し、日本の大学院生と協力して国際ワークショップを開催できるよう基盤を整える。様々な文化的・宗教的背景を持った若手研究者が自立して共同作業を行うことによって、問題発見と問題解決のモデル・ケースを蓄積していく。

【インターネットによる国際ゼミ交流の企画、eラーニングによる単位互換制度の整備】

オンデマンド型の授業を複数言語で配信することによって、国内だけでなく、東南アジアや中東における諸大学の学生が異なる一神教世界や日本のような多神教世界に対する理解を深めることができるようにする。そして、リアル・タイムで共同のゼミを行うことにより、教員間および学生間の交流を深めていく。

## 9. 研究教育拠点形成活動実績

### ① 目的の達成状況

#### 1) 世界最高水準の研究教育拠点形成計画全体の目的達成度

目的は概ね達成したと考える。「一神教学際研究センター」(CISMOR)を拠点として、世界的に見ても、まだ決して十分とはいえない総合的・学際的な一神教研究の領域を開拓してきた。国内における研究者のネットワークを構築するとどまらず、アメリカ、中東、アジアを中心にグローバルな研究ネットワークを作ることができた。それは多数の海外協定機関の形成において具体的に結実している。

国際ワークショップなどの機会を通じて、世界的な研究者たちと交流を深めてきたことによって、国際社会におけるCISMORの認知度は高まった。特に、学術雑誌『一神教学際研究』や国際ワークショップの報告書、および、ウェブサイトのアラビア語で発信したことは中東世界におけるCISMORの認知度向上に寄与した。イスラーム世界からの研究者によるCISMOR訪問や面談依頼が絶えないこと、本拠点リーダー等が中東における国際会議で、たびたび招待講演を行ってきたこと、カイロ大学からの呼びかけにより *Japanese and Oriental Studies* 誌 (アラビア語学術誌) を共同編集で刊行するに至ったこと、また、非欧米圏ではじめてCISMORが「アメリカ宗教学会」の連携学術団体と認定されたことから、本拠点がすでに世界的なレベルで、その研究水準の高さを認められつつあることがわかる。

このように、当初の研究計画における目的の主要部分は達成されたと言えるが、細部においては、計画の見直しや、時間不足から十分に展開しきれなかった課題もある。当初計画では「比較一神教学会」を設立することになっていたが、CISMORの継続的な各種活動を通して、学会レベルの関連研究者の交流が可能であると判断したため、学会は設立しなかった。

中間評価においては、日本宗教と一神教を関係づけること、また、一神教の基礎研究・歴史研究を深めることの必要性が指摘された。それぞれの点について対策を講じてきたが、まだ十分といえるほどの結果を出すには至っていない。

ただし、本拠点が尽力し、京都にある仏教系6大学とともに平成17年に設立した「京都・宗教学大学院連合」は、一神教と仏教をはじめとする日本宗教をつなぐものとして高く評価されてきた。平成18年度からは、単位互換制度を実施している。また、平成18年以降、「仏教と一神教」研究会を実施し、本格的な比較研究を行う素地を作りつつある。平成18年に本拠点の部門研究に「日本宗教から一神教への提言」研究会を新設し、仏教や日本宗教の専門家との共同研究を開始しているが、課題の大きさを認識できたとはいえ、まだ具体的な成果を出すには至っていない。

#### 2) 人材育成面での成果と拠点形成への寄与

本プログラムの中核拠点である神学研究科は、イスラーム研究者3名、ユダヤ教研究者2名を「専任教員」として採用し、従来から在籍するキリスト教研究者9名とともに、共同して一神教研究・教育を行うことができる教員体制とカリキュラムを実現した。これは我が国においては唯一のものであり、世界的に見ても画期的な拠点形成であると言える。

世界レベルでの学術ネットワークを活用して、本拠点の事業のほとんど全てに若手研究者を積極的に関与させ、第一線の研究者と触れ合う機会をつくってきた。特に有望な若手研究者に対しては、COE研究指導員、COEリサーチ・アシスタント、COE奨励研究員の制度を通じて研究助成を行ってきた。COE奨励研究員は外部にも公募し、関連研究を進めている学外大学院生を採用してきた。また、イスラエル、シリア、マレーシア、アメリカにおける夏期研修を行ってきた。本拠点は「文明の共存のためのスペシャリスト」の育成を目標としてきたが、本拠点は近年、イランおよびマレーシアにおける外務省専門調査員を輩出しており、キャリアパス形成が着実に進んでいることを示している。

また、本拠点の基盤となる神学研究科では平成16年度に「一神教学際研究コース」を新設し、若手研究者の育成を本格的に始める基盤を整えた。そのコースで学位論文の完成を目指す若手研究者たちが本拠点の活動に積極的に関わることによって、所属大学院の違いを超えた若手研究者の交流がなされてきた。なお、平成21

年度には、神学研究科に修士・博士（一神教研究）の学位を新設することが決定している。

### 3) 研究活動面での新たな分野の創成や、学術的知見等

本拠点は、イスラーム世界やキリスト教世界では実現困難な、三つの一神教を代表する研究者・宗教指導者同士の交流を実現し、どこに文明間の対話を阻害する要因があるのかを相互に確認する機会を作ってきた。

三つの一神教は「同根の宗教」でありながら、特に近代以降、相互に対立することが多かったため、三つの一神教を同時に総合的に「一神教研究」として研究する拠点は、海外においてもほとんど存在しない。海外には、一般的な宗教間対話のための機関は多数存在しているが、三つの一神教間の対話に限定した研究機関は多くはない。より一神教に特化したものとして、ムスリム・クリスチャン相互理解センター（ジョージタウン大学）や、国際キリスト教・ユダヤ教協議会などが存在しており、一神教間の相互理解の促進に重要な役割を果たしている。しかし、そのほとんどが、三つの一神教の内の二者の間の関係に限定している。その理由の一部には、ムスリムとユダヤ教徒が同席することに対して過敏な神経を使わなければならない社会状況がある。それに対し、日本は歴史的、地政学的に、一神教間の対立と抗争の外部に位置してきたために、それらを客観的に研究し、仲介者としての役割を果たすことのできる有利な位置にある。日本社会において一神教研究を積極的に推進していくことが、国際社会、とりわけ一神教世界における信頼を得ていく一助となることを、数々の国際交流の場において確認することができた。

### 4) 事業推進担当者相互の有機的連携

異なる専門分野を持つ事業推進担当者同士が有機的連携をすることができるように、二つの部門研究会、「一神教の再考と文明の対話」と「アメリカのグローバル戦略と一神教世界」を研究活動の中心に据えてきた。前者の研究会は、これまでほとんど交わることのなかったユダヤ教、キリスト教、イスラームの研究者が一堂に会して、一神教研究の共通基盤を探ってい

ったという点において開拓的な意義を持っている。さらに、後者の研究会では、一神教間の対話的研究にとどまらず、一神教世界を文明論的な視座から見据えるために、国際政治、国際安全保障論、国際軍事戦略、科学史などの専門家と共に、学際的な研究を推進してきた。前者および後者の研究会は学問的性格がかなり異なるため、当初、その両者を有機的に関係づけることは困難であった。しかし、それぞれの研究会に属する者たちが、相互に他方の研究会に参加することによって、徐々に有機的なつながりを見出すことができるようになった。

部門研究会の他、「ヨーロッパにおける宗教政策」研究会、「イラン・イスラーム体制における西欧理解」研究会、「一神教世界における科学と近代化」研究会など、六つの特定研究プロジェクトを立ち上げ、少人数で、より焦点を絞った研究活動を行ってきた。また平成17年以降、ユダヤ学会議を毎年開催してきた。そこではユダヤ教に接点を持つ歴史学・聖書学・思想の専門家が一堂に会し、古代・中世・現代の時代区分のもと、ユダヤ学に関する学際的な研究を進めてきた。

以上のような多彩な研究活動を総合し、研究活動の方向性を吟味する場として、毎年、世界の第一線の研究者を交えて、国際ワークショップを開催してきた。このような機会を通じて、世界レベルの知的刺激を受けながら、事業推進担当者相互の問題意識の共有が促進された。

### 5) 国際競争力ある大学づくりへの貢献度

本拠点は、国際イスラーム大学（マレーシア）、クフタロー財団・アブヌール学院（シリア）、王立宗教間対話研究所（ヨルダン）、戦略研究所（イラン）、バーゲル・アル・オルム大学（イラン）、カイロ大学（エジプト）、ヘブライ大学（イスラエル）、ハートフォード神学校（アメリカ）、バークレー神学大学院連合（アメリカ）と学術交流協定を結び、研究者および大学院生の相互交流を進めてきた。いくつかの海外交流拠点とは、共同のプロジェクトを実施し、マレーシア、シリア、イスラエルでは共催の国際シンポジウムを行った。また、拠点リーダーや事業推進担当者が海外において招待講演を行い、本拠点の研究活動を広く国際社会に伝達



している。これらの活動の一部が現地の新聞で報じられたことも、本拠点の活動に対する関心の高さを示している。国際ワークショップ等のために海外から招聘した研究者の総数は68名にのぼる。このような国際社会との活発な交流を通じて、本学の認知度を高め、国際競争力の向上に寄与したと言える。

## 6) 国内外に向けた情報発信

学術誌『一神教学際研究』や国際ワークショップ報告書など、本拠点の中心的な研究報告およびウェブサイトについては、日本語・英語・アラビア語による成果報告・情報発信を行ってきた。英語による情報発信は当然のことであるが、今日、文明論的な対話を中立的な立場で仲介していくためには、アラビア語での情報発信を欠くことはできない。実際、アラビア語での情報提供やコミュニケーションを行うことによって、本拠点は、イスラーム世界からも高い評価と信頼を得ている。

一神教世界の实情について十分な知識を持ち合わせていない日本社会に対しては、公開の講演会やシンポジウムの実施（計40回、計約5,400名来場）、ニューズレター『CISMOR Voice』、DVDの配付などを通じて積極的な情報提供を行ってきた。ほとんどすべての講演会は動画としてストリーミング配信している。また、世界各地で大きな騒動を引き起こしたムハンマド風刺画問題に関しては、世界各地の反応を総合的に考察した拠点リーダー編著の『イスラームとEUの宗教伝統は共存できるか』（明石書店、2007年）を刊行した。また、事業推進担当者の小原・中田・手島は、三つの一神教の立場から『原理主義から世界の動きが見える』（PHP新書、2006年）を刊行し、一神教世界が抱える問題群を明らかにした。さらに、2008年度中に、21世紀COEの成果論文集『共存を妨げるもの ―一神教世界の現在』（仮題）と『アメリカのグローバル戦略とイスラーム世界』（仮題）を明石書店より出版の予定である。

## 7) 拠点形成費等補助金の使途について（拠点形成のため効果的に使用されたか）

一神教学際研究センター事務局の3名の職員の人件費は、平成15～18年度は拠点形成費等補

助金から支出されたが、平成19年度からは、大学の学内経費によってまかなわれた。それによって、ほぼ1千万円を研究教育のために使用することができた。

拠点形成のための教育・研究に関する補助金の使途については、一神教学際研究センター運営委員会によって企画・決定され、一神教学際研究センター事務局及び研究開発推進機構・研究支援課によって、事業計画どおり適切に執行された。また、財務部・経理課による厳正な支払決済処理により、補助金は適正に運営された。

## ②今後の展望

本プログラムの教育分野での目的を実現するために、中核拠点としての神学研究科は3名のイスラーム研究者と2名のユダヤ教研究者を、専任教員として採用した。本プログラム終了後も、神学研究科における一神教研究・教育は継続して行われる。さらに、設置が予定されている「グローバルスタディーズ研究科」との連携によって、「文明の共存のためのプロフェッショナル」育成という教育目的は、さらに発展することが期待される。

本プログラムのもう一つの拠点として設置された「一神教学際研究センター」は、プログラム終了後も、大学の「高等研究教育機構」に所属する恒常的な先端的研究センターとして、大学による財政的・人的支援のもとで運営されることが既に決定されている。

## ③その他（世界的な研究教育拠点の形成が学内外に与えた影響度）

学内的には、本学の建学の精神である「キリスト教主義」に関連した「一神教」についての研究・教育が21世紀COEプログラムに採択されたことによって、本学の大学としてのアイデンティティが改めて確認されることとなった。また、学外においては、本学がわが国における唯一の「一神教」についての研究・教育拠点であることが、広く認識されることとなった。国際的にも、「1)世界最高水準の研究教育拠点形成計画全体の目的達成度」（5頁）において示したように、本拠点がアジアにおける「一神教研究」の拠点であることが認められつつある。

## 21世紀COEプログラム 平成15年度採択拠点事業結果報告書

機 関 名	同志社大学	拠点番号	J 24
拠点のプログラム名称	一神教の学際的研究 ―文明の共存と安全保障の視点から―		
1. 研究活動実績			
①この拠点形成計画に関連した主な発表論文名・著書名【公表】			
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・事業推進担当者（拠点リーダーを含む）が事業実施期間中に既に発表したこの拠点形成計画に関連した主な論文等〔著書、公刊論文、学術雑誌、その他当該プログラムにおいて公刊したもの〕</li> <li>・本拠点形成計画の成果で、ディスカッション・ペーパー、Web等の形式で公開されているものなど速報性のあるもの</li> </ul> <p>※著者名（全員）、論文名、著書名、学会誌名、巻(号)、最初と最後の頁、発表年（西暦）の順に記入</p> <p>波下線（<u>          </u>）：拠点からコピーが提出されている論文</p> <p>下線（<u>          </u>）：拠点を形成する専攻等に所属し、拠点の研究活動に参加している博士課程後期学生</p> </div>			
森 孝一「"God Bless America"と星条旗―『同時多発テロ』後のアメリカを読み解く」、『民と神と神々とイスラーム、アメリカを読む』、197-231頁、関西学院大学出版会、2004年。			
森 孝一「アメリカの『見えざる国教』再考」、『アメリカ研究』38、123-140頁、2004年。			
森 孝一「対談・宗教復興と一神教・山内昌之×森 孝一」、『現代宗教2005』、7-36頁、東京堂出版、2005年。			
森 孝一『EUとイスラームの宗教伝統は共存できるか―ムハンマドの風刺画事件』の本質』、382頁、明石書店、2007年。			
森 孝一「アメリカの世界政策とその宗教的次元」、『軍縮地球市民』No.7、20-25頁、2007年。			
小原克博 "Hiroshima and the Pacifism/Just War Debate, " <i>Interface: A Forum for Theology in the World</i> , Vol. 6, No. 2, pp. 95-106, 2003.			
小原克博 "Can Human Beings Overcome Anthropocentrism? Focusing on J. Moltmann's Idea of the Rights of the Earth, " <i>Theological Forum</i> , Vol. 36, pp. 23-33, 2004.			
小原克博「一神教と多神教をめぐるディスコースとリアルポリティーク」、『宗教研究』第345号、221-244頁、2005年。			
小原克博「第三章 キリストと原理主義―変遷する原理の過去と未来」、『原理主義から世界の動きが見える―キリスト教・イスラーム・ユダヤ教の真実と虚像―』、17-40頁、PHP研究所、2006年。			
小原克博「宗教多元主義モデルに対する批判的考察―「排他主義」と「包括主義」の再考」、『基督教研究』第69巻第2号、23-44頁、2008年。			
石川 立「ヤハウェはわれらの正義」、『基督教研究』第65巻第2号、45-65頁、2004年。			
中田 考『イスラーム法の在立構造』、566頁、ナカニシヤ出版、2003年。			
中田 考「イスラームの世界観と宗教対話」、『民と神と神々とイスラーム・アメリカ・日本を読む』、169-196頁、2004年。			
中田 考「イスラームとテロ」、『大航海』No. 54、99-107頁、2005年。			
中田 考「イスラームと原理主義―歪められた実像」、『原理主義から世界の動きが見える―キリスト教・イスラーム・ユダヤ教の真実と虚像―』、163-216頁、PHP研究所、2006年。			
中田 考「幻想の自由と偶像破壊の神話―イスラーム法学からのアプローチ」、『EUとイスラームの宗教伝統は共存できるか―ムハンマドの風刺画事件』の本質』、278-310頁、明石書店、2007年。			
四戸潤弥「イスラーム社会の女性の権利と、一夫多妻の検討―4人妻規制と預言者の多妻の理解―」、『シャリーア研究』創刊号、107-143頁、2004年。			
四戸潤弥「北一輝のイスラーム理解と日本人ムスリムとの交友」、『季刊アラブ』No. 110、14-17頁、2004年。			
四戸潤弥「イスラーム法源の検討―アッラー（神）の法と、人間の法の境界線」、『シャリーア研究』第二号、1-30頁、2005年。			
四戸潤弥「アラビア湾岸諸国―対話の前提となるイスラームとの共存の承認―」、『EUとイスラームの宗教伝統は共存できるか―ムハンマドの風刺画事件』の本質』、170-194頁、明石書店、2007年。			
四戸潤弥「クルアーンにおけるイスラームの意味―クルアーンに内在する他宗教との対話の可能性について―」、『シャリーア研究』第三号、1-16頁、2006年。			
富田健次『イスラーム統治論・大ジハード論』、351頁、平凡社、2003年。			
富田健次「イスラームの革命―ホメイニーとハタミー」、『現代イスラーム思想と政治運動』、117-138頁、東京大学出版会、2003年。			
富田健次「イランのイスラーム統治体制と現代―文明の衝突の対立線を求めて―」、『一神教学際研究』1、74-95頁、2005年。			
富田健次「イラン―文明の衝突と対話の狭間で」、『EUとイスラームの宗教伝統は共存できるか―ムハンマドの風刺画事件』の本質』、92-113頁、明石書店、2007年。			
富田健次「イスラーム統治と民主制―交差と乖離」、『一神教学際研究』3、1-17頁、2007年。			
77*・コハ "Political Loyalty in the Biblical Account of 1 Samuel 20-22, in Light of Hittite texts, " <i>Vetus Testamentum</i> 55, 2, pp. 251-268, 2005.			
77*・コハ "宗教の誕生時における暴力―古代近東文書に照らした出エジプト記19-40章』、『一神教学際研究』1、96-111頁、2005年。			
77*・コハ "Reflections of Hittite and Emar Practices in the Sinaitic Traditions of Moses, " <i>Shenaton: An Annual for Biblical and Ancient Near Eastern Studies</i> 16, pp. 110-114, 2006.			
77*・コハ <i>Hittite Priesthood</i> , Winter Verlag Heidelberg, 2006.			
村田晃嗣『アメリカ外交―苦悩と希望』、260頁、講談社現代新書、2005年。			
村田晃嗣 "The U. S. -Japan Security Relationship: A Japanese View, " <i>George W. Bush and East Asia: A First Term Assessment</i> , pp. 145-156, 2005.			
村田晃嗣「イラク戦争後の日米関係」、『国際問題』5月号、2004年。			
村田晃嗣「ブッシュ外交と国連」、『国際安全保障』34巻2号、35-49頁、2006年。			
村田晃嗣「レーガン政権の安全保障政策―対ソ姿勢と政策プロセス―」、『同志社法学』58巻4号、1-26頁、2006年。			
バーバラ・シグムント "Faithful Living in a Multi-faith World, " <i>Clergy Journal</i> , pp. 9-11, 2003.			
臼杵 陽『世界化するパレスチナ/イスラエル紛争』、164頁、岩波書店、2004年。			
臼杵 陽 <i>Population Movement beyond the Middle East: Migration, Diaspora, and Network</i> , JCAS Symposium Series, No. 17, pp. 319, 2005.			
臼杵 陽「近現代のパレスチナ/イスラエル」、『地中海世界史第2巻 多元的世界の展開』、315-370頁、青木書店、2003年。			

- 臼杵 陽 "The Japanese 'Discovery' of Muslims and Jews in the Wartime Empire of Japan, " *Population Movement beyond the Middle East: Migration, Diaspora, and Network*, JCAS Symposium Series, No. 17, pp.11-21, 2005.
- 臼杵 陽 "Jerusalem in the Mind of the Japanese: Two Japanese Christian Intellectuals on Ottoman and British Palestine, " *Annals of Japan Association for Middle East Studies*, Vol.19, No.2, pp.35-47, 2004.
- 三浦伸夫 「数学におけるイスラム的要素」、『イスラムとIT』、65-74頁、2004年。
- 三浦伸夫 「ジャービル・イブン・ハイヤーン—初期アラビアの錬金術思想」、『化学史研究』No.112、153-169頁、2005年。
- 三浦伸夫 「アラビア数学における幾何学的発想の起源と展開」、『国際文化学部紀要』No.25、65-106頁、2006年。
- 三浦伸夫 「14世紀の運動論」、『中世と近世のあいだ』、365-388頁、知泉書館、2007年。
- 三浦伸夫 「アルヴァロ・トマスの運動論における数学」、『国際文化学研究』第28号、67-110頁、2007年。
- 田原拓治 「『パンドラの箱』開けたアメリカ—フセイン政権後、液体化するイラク情勢」、『理戦』秋号、171-181頁、2003年。
- 田原拓治 「『解放』が生んだメディア新地図—占領下における自由と規制—」、『新聞研究』4月号、25-28頁、2004年。
- 田原拓治 「イラク戦争から何を学ぶのか—宗教戦争の時代を迎えるなかで—」、『情況』7月号、6-19頁、2004年。
- 田原 牧 (拓治) 「パレスチナ『内ゲバ』の深層」、『季刊・軍縮地球市民』春号、212-217頁、明治大学軍縮研究所、2007年。
- 田原 牧 (拓治) 「レバノン『ファタハ・イスラーム』事件の深層」、『隔月刊・インパクション』162号、140-152頁、インパクト出版会、2008年。
- 松永泰行 「革命後イランにおける『ナショナル・アイデンティティ』—イラン・ネイションの『イスラーム革命』」、『イスラーム地域の国家とナショナリズム』第5巻、105-124頁、東京大学出版会、2005年。
- 松永泰行 「体制内改革の『失敗』とイラン・イスラーム共和国体制基盤」、『中東・中央アジア諸国における権力構造—たたかたかな国家・翻弄される社会—』、145-175頁、岩波書店、2005年。
- 松永泰行 「試される『デモクラシー』—イラン・イスラーム共和国とプッシュ政権」、『地域研究』第6巻第1号、109-118頁、2004年。
- 松永泰行 「イスラーム『対米ジハード主義』と『対テロ戦争』」、『地球型社会の危機—グローバル化の断面図—』、245-270頁、芦書房、2005年。
- 松永泰行 "Mohsen Kadivar, an Advocate of Postrevivalist Islam in Iran, " *British Journal of Middle Eastern Studies*, Vol. 34, Issue3, pp. 317-329, 2007.
- 手島勲矢 「メタファーとブシャット—中世ユダヤ聖書解釈の構造について」、『CISMORユダヤ学会議』Vol.1、58-78頁、2006年。
- 手島勲矢 「ユダヤ教と原理主義—シオニズムの源流を求めて」、『原理主義から世界の動きが見える—キリスト教・イスラーム・ユダヤ教の真実と虚像—』第5章、218-284頁、PHP研究所、2006年。
- 手島勲矢 「スピノザのマイモニデス批判—中世ユダヤの『比喩』解釈との係わりで—」、『スピノザ』第7号、47-76頁、2006年。
- ザミール・ハ 「Tolerance in Contemporary Japanese Society and Terrorism, The Center of Oriental Studies, 2006.
- ザミール・ハ 「イスラーム日本の先駆『田中逸平』そのイスラーム文化論」、『田中逸平その5』、425-464頁、2005年。
- ザミール・ハ "Contemporary Islamic Trends: Case of Egypt Compared with the Case of India & Pakistan, " 『国際シンポジウム 交差するアジア・北アフリカ文化・科学技術研究論文報告集』、25-41頁、筑波大学北アフリカ研究センター、2005年。
- ザミール・ハ 「イスラーム原理主義の物語?」、『クアドランテ』No.8、49-54頁、2006年。
- ザミール・ハ 「エジプト—政府・国民を挙げての平和的抗議運動」、『EUとイスラームの宗教伝統は共存できるか—「ムハンマドの風刺画事件」の本質』、135-169頁、明石書店、2007年。
- ミシェル・モル 「風刺画問題の背景を探る」、『EUとイスラームの宗教伝統は共存できるか—「ムハンマドの風刺画事件」の本質』、16-64頁、明石書店、2007年。
- オスマン・バカル *The History and Philosophy of Islamic Science*, Iran Mashhad, 2006.
- オスマン・バカル "Islam, Ethnicity, Pluralism and Democracy: Malaysia's Unique Experience, " *Islamic Democratic Discourse: Theory, Debates, and Philosophical Perspectives*, pp.63-83, Lexington Books, 2006.
- オスマン・バカル "Dialogues of Civilizations after 9/11 with Specific Reference to the West-Islam Cultural Divide: Promises and Obstacles, " *2005 Civilization and Peace*, Seoul P&P, 2005.
- オスマン・バカル "Islam and the Future of Inter-religious Peace in Asia, " *Role of Religious and Philosophical Traditions in Promoting World Peace: Asian Perspectives*, Singapore Konrad Adenauer Foundation, 2007.
- オスマン・バカル *Tawhid and Science: Islamic Perspectives on Religion and Science*, Arah Publications, 2nd Edition, 2008.
- ジョン・L・エズラット *Religion and Globalization*, Oxford University Press, 2007.
- ジョン・L・エズラット *Asian Islam in the 21st Century*, Oxford University Press, 2007.
- ジョン・L・エズラット "To Compare Religions, Compare Their Ideals and Their Realities, " *Naples News*, 2007.
- ジョン・L・エズラット "True Islam has been Distorted, " *Newsweek.WashingtonPost.com*, 2007.
- ジョン・L・エズラット "Islam & Violence, " *Peacejournalism.com*, 2007.
- キム・ヒョギョン "Toward a Christotao: Christ as the Theanthropocosmic Tao, " *The Chinese Face of Jesus Christ*, Vol.3b, pp.1457-1480, 2007.
- 村田幸子 *The Sagely Learning of Liu Ahi: Islamic Thought in Confucian Terms*, 400 pp, Cambridge Harvard University Press, 2008.
- 村田幸子 "The Resources for Ecumenical Thought in Chinese Islam, " *Forum Bosnae*, 38, pp.42-54, 2007.
- 村田幸子 "Feminine Spirituality: The Lost Dimension in the Western Perception of Islam, " *Forum Bosnae*, 39, pp.218-231, 2007.
- 村田幸子 "Form and Meaning in Chinese-Language Islam, " *Rumi's Philosophy of Love/Rumijeva Filozofija Ubavi*, pp.83-94(English), pp.81-92(Bosnian), 2007.

## ②国際会議等の開催状況【公表】

(事業実施期間中に開催した主な国際会議等の開催時期・場所、会議等の名称、参加人数(うち外国人参加者数)、主な招待講演者(3名程度))

**開催時期・場所:**平成16年2月20日-21日・同志社大学 今出川キャンパス 明德館1番教室、ウェスティン都ホテル京都 **会議名称:**国際ワークショップ「宗教における戦争と暴力—一神教世界からの応答」 **参加人数:**74名(うち外国人参加者数23名) **主な招待講演者:**アシュラフ・ポルージェルディー(イラン内務省)、イラン・パッペ(ハイファ大学)、マーク・ジョーギンスマイヤー(カリフォルニア大学 サンタバーバラ校)

**開催時期・場所:**平成16年11月13日-14日・同志社大学今出川キャンパス 寒梅館ハーディーホール **会議名称:**一神教聖職者交流会議「現代アメリカのユダヤ教・キリスト教・イスラームが直面する諸問題」 **参加人数:**56名(うち外国人参加者数16名) **主な招待講演者:**ミラ・ワッサーマン(インディアナ・ベツ・シャローム ユダヤ共同体)、マハ・エルジェナイディー(カリフォルニア イスラームネットワークグループ)、ロン・サイダー(ペンシルバニア・イースタン神学校)

**開催時期・場所:**平成17年11月5日-6日・同志社大学今出川キャンパス 寒梅館ハーディーホール **会議名称:**国際ワークショップ「東アジアにおける近代化とナショナル・アイデンティティ— グローバリゼーションと宗教復興」 **参加人数:**56名(うち外国人参加者数18名) **主な招待講演者:**カマル・オニアー・カマルザマン(マレーシア国際イスラーム大学)、高 師寧(中国社会科学院)、ホセ・マリア・マナリゴッド・クルス(アテネオ・デ・マニラ大学)

**開催時期・場所:**平成17年12月28日-29日・シャイフ・アフマド・クフタロウ財団(シリア) **会議名称:**共催国際シンポジウム「非イスラーム国家におけるイスラームとムスリム」 **参加人数:**400名(うち外国人参加者数395名) **主な招待講演者:**アブドッダーイム・ヌマイル(アズハル大学)、リナ・アルフムスィー(アズハル大学)、ファールク・アクビク(シャイフ・アフマド・クフタロウ財団)

**開催時期・場所:**平成18年3月4日・パン・パシフィック・ホテル(マレーシア・クアラルンプール) **会議名称:**共催国際シンポジウム「一神教における救済とメシア運動— その現代的意味」 **参加人数:**50名(うち外国人参加者数47名) **主な招待講演者:**タミーム・ウシャマ(マレーシア国際イスラーム大学)、アブドル・ラシッド・モテン(マレーシア国際イスラーム大学)、イシャム・パワン・アーマド(マレーシア国際イスラーム大学)

**開催時期・場所:**平成18年6月24日・同志社大学今出川キャンパス 寒梅館ハーディーホール、新島会館 **会議名称:**共催国際シンポジウム「パレスチナとイスラエルの対話— この一年を回顧する」 **参加人数:**40名(うち外国人参加者数8名) **主な招待講演者:**サイード・ザイダーニー(アル・クドス大学)、エヤル・ベン-アリ(ヘブライ大学)、ワリード・サーレム(パノラマセンター・エルサレムオフィス)

**開催時期・場所:**平成18年11月4日-5日・同志社大学今出川キャンパス 明德館1番教室、新島会館 **会議名称:**国際ワークショップ「『ヨーロッパ』という自己理解と一神教」 **参加人数:**41名(うち外国人参加者数9名) **主な招待講演者:**ハミット・ボザルラン(イスラーム・イスラーム社会研究所)、リズベット・クリストファーセン(コペンハーゲン大学)、アブラハム・ソーテンドルプ(進歩的ユダヤ教世界連合)

**開催時期・場所:**平成18年12月26日・シャイフ・アフマド・クフタロウ財団(シリア) **会議名称:**共催国際シンポジウム「『新中東』の光の下のスンナ派・シーア派関係の未来」 **参加人数:**350名(うち外国人参加者数345名) **主な招待講演者:**中田 考(同志社大学)、奥田 敦(慶応義塾大学)

**開催時期・場所:**平成19年5月12日・同志社大学 今出川キャンパス 寧静館5階会議室 **会議名称:**共催国際シンポジウム「一神教における救済と多元主義」 **参加人数:**34名(うち外国人参加者数6名) **主な招待講演者:**ハジザン・ヌーン(マレーシア国際イスラーム大学)、ハサン・アーマド・イブラヒム(マレーシア国際イスラーム大学)、イブラヒム・ムハンマド・ゼイン(マレーシア国際イスラーム大学)

**開催時期・場所:**平成19年10月20日-21日・新島会館 **会議名称:**国際ワークショップ「イスラームと西洋—アメリカの外交思想を検証する」 **参加人数:**47名(うち外国人参加者数9名) **主な招待講演者:**フランシス・フクヤマ(ジョンズ・ホプキンス大学)、アフマド・ヴァーエズィー・ジャゼイー(バーゲロールーム大学教授)、ノーマン・フィンケルシュタイン(デポール大学)

**開催時期・場所:**平成20年3月6日・イラン・戦略研究所 6階会議室 **会議名称:**共催国際会議「民主主義と宗教の関係—イランと日本の場合—」 **参加人数:**10名(うち外国人参加者数8名) **主な招待講演者:**小原克博(同志社大学)

## 2. 教育活動実績【公表】

博士課程等若手研究者の人材育成プログラムなど特色ある教育取組等についての、各取組の対象（選抜するものであればその方法を含む）、実施時期、具体的内容

### COEリサーチアシスタント制度

**対象**：本学大学院神学研究科、文学研究科、法学研究科、アメリカ研究科の博士課程（後期課程）に在学する者および他大学大学院博士課程（後期課程）に在学する者で本学専任教員である事業推進担当者の推薦を受けられる者。

**選抜方法**：応募者によって提出された願書に基づき、研究拠点の研究センターに設置する選定委員会において選考し、候補者が所属する研究科長会の議を経て任用する。**実施時期**：平成15年度～平成19年度 **具体的内容**：各年度ごとに採用。採用期間は1年以内。月額5万円の給与を支給。実施期間中の採用者数は延べ19名

### COE奨励研究員制度

**対象**：大学院後期課程に在学し、かつ「一神教の学際的研究」に関連するテーマを研究している者。（学内・学外を問わない）**選抜方法**：応募者によって提出された願書に基づき、研究拠点の研究センターに設置する選定委員会において選考し、学長が決定する。**実施時期**：平成15年度～平成19年度 **具体的内容**：各年度ごとに採用。採用期間は1年以内。月額5万円×採用月数を研究に直接必要な経費に充当。実施期間中の採用者数は延べ21名

### 語学インテンシブコース

#### 英語インテンシブコース

**対象**：神学研究科博士後期課程に在学する者 **実施期間**：平成16年4月20日～7月20日（毎週火曜日の5講時）、平成17年4月12日～7月12日（毎週火曜日の5講時）平成17年10月4日～平成18年1月17日（毎週火曜日の5講時）、平成18年4月18日～7月11日（毎週火曜日の5講時）平成18年10月3日～平成19年1月16日（毎週火曜日の5講時）、平成19年4月17日～7月10日（毎週火曜日の5講時）平成19年10月2日～平成20年1月15日（毎週火曜日の5講時）**具体的内容**：ディベートおよびプレゼンテーションの訓練

#### アラビア語インテンシブコース

**対象**：神学研究科、文学研究科、法学研究科、アメリカ研究科の博士課程（後期課程）に在学する者  
**実施期間**：平成16年8月4日～6日（初級）平成17年2月12日～13日（中級）、平成17年6月25日、27日、30日（前期）平成18年2月26日～3月1日（後期）平成18年7月8日、15日（前期）平成19年3月12日、19日（後期）、平成20年2月27日、3月1日 **具体的内容**：アラビア語圏出身の講師による集中指導

#### ヘブライ語インテンシブコース

**対象**：神学研究科、文学研究科、法学研究科、アメリカ研究科の博士課程（後期課程）に在学する者  
**実施期間**：平成17年2月14日～15日（初級）、平成18年2月13日～14日（中級）、16日～17日（上級）平成19年2月2日～3日（初級）、8日～9日（中級）、13日～14日（上級）、平成20年2月18日～19日（初級）、2月21日～22日（中級）、2月25日～26日（上級）**具体的内容**：イスラエル人講師による集中指導

### 夏期研修プログラム

#### シリア夏期研修プログラム

**対象**：神学研究科、文学研究科、法学研究科、アメリカ研究科の博士課程（後期課程）に在学する者 **実施期間**：平成17年8月16～28日、平成19年8月2日～14日

#### イスラエル夏期研修プログラム

**対象**：神学研究科、文学研究科、法学研究科、アメリカ研究科の博士課程（後期課程）に在学する者 **実施期間**：平成16年8月17日～25日、平成17年8月2日～11日、平成19年8月12日～23日

#### マレーシア夏期研修プログラム

**対象**：神学研究科、文学研究科、法学研究科、アメリカ研究科の博士課程（後期課程）に在学する者  
**実施期間**：平成16年8月15日～29日、平成17年8月1日～15日、平成18年9月4日～26日、平成19年8月21日～9月2日

#### アメリカ夏期研修プログラム

**対象**：神学研究科、文学研究科、法学研究科、アメリカ研究科の博士課程（後期課程）に在学する者  
**実施期間**：平成16年9月4日～13日

### 学生交流プログラム

#### 日本・マレーシア相互理解学生交換プログラム

**対象**：神学研究科、文学研究科、法学研究科、アメリカ研究科の博士課程（後期課程）に在学する者  
**実施期間**：平成17年11月18日～28日

21世紀COEプログラム委員会における事後評価結果

(総括評価)

設定された目的は概ね達成された

(コメント)

拠点形成計画全体については、キリスト教研究の蓄積の上にユダヤ教やイスラームも含めた一神教研究の交流促進や学際的展開、若手研究者の国際化などが活発に試みられ、大学全体の強力の支援の下に、目的は概ね達成されたと評価できる。

人材育成面では、語学教育の強化や国際的発信力強化などにおいて、積極的な試みがあったことは評価できる。

研究活動面では、国際的な発信、特に中東地域での研究交流や国際関係論と宗教学の連携の取組など、宗教研究の国際化と学際化に取り組んだことは高く評価できる。また大学の特色を生かしつつ、立場や信条を異にする宗教者および宗教研究者に多様な対話の機会を提供し、宗教間の理解を促進する活動に積極的に取り組まれたことは評価できる。一神教研究における拠点独自の理論的展開については、今後の一層の発展を期待する。

補助事業終了後の持続的展開については、大学全体としての支援も具体化されており、拠点形成を通じて獲得された研究ネットワークを活用した発展が期待できると評価する。